

the spirit of the times

草創期の水戸 JC（創立 30 周年記念誌より）

名誉会員 故 安田 仁

時の常陽銀行亀山甚頭取の亀山学校とも言うべき「三四会」が生れたのが昭和 25 年 12 月で、毎月 1 回、県内各地から集った青年実業人が、亀山さんの話を聞いて自己研鑽をする勉強会であった。30 代、40 代の集りなので、「三四会」と言う会名になったが、ここから幾多の人材が巣立ったのである。「三四会」が出来ると間もなく、やはり常陽の中山毅雄常務から（その頃は正副頭取の下に三常務制だった）「30 代、40 代の面倒を見ても 20 代は放っておくのか」と話があり、「勿論 20 代の集りも欲しいが誰か中心が居なければならない。常務が中心になってくれますか」ときくと、「私でよければ」という返事が返ってきた。そこで早速若い人を集めることになり、「三四会」がそうであったように水戸市内ばかりでなく広く呼びかけることにしてとりあえず笠間と那珂湊から来てもらった。毎月 20 日に集ることにして会名が「二十日会」と名付けられた。（中略）

そのような集りを重ねている間に、日本商工会議所で青年会議所の組織を知った。その頃の日本青年会議所は東京商工会議所のビルに同居していたのである。ロータリークラブの青年版とも言うべき、青年会議所こそ「二十日会」の志向するところだったので、その旨を中山さんに話すと、これもまた大賛成で青年会議所創立の準備を進めることになった。

ところが突然、茨城日野自動車の皆川貞雄社長（現茨城交通社長）から「東京の取引先のヤナセ自動車梁瀬社長から水戸に青年会議所を創って君が理事長になれと勧められた。よろしく頼む。」と申し入れがあった。決して悪い話でないのであるが「二十日会」の流れとは全く別で、どうすればよいか思案したのであったが、気がつくと、当時の JC の会員年齢は 35 歳が定年で、皆川さんはひと月も経たない間にオーバーしてしまい、創立総会以前に失格してしまう。その旨を説明すると「そういう事ならやむを得まい。みんなでよい JC を創ってくれ」と励ましてくれた。この話もあって準備が一層急がれて、スポンサーである前橋 JC へ視察に行くことになった。碓井甲一（初代理事長）久賀谷惣一、岩淵徳太郎の 3 人に私が、前橋の視察を終ってその夜は水上温泉泊り。ホテルの仲居さんが何でも海軍少将の未亡人とかで品のよい美人さんでその後一行中の誰かさんが水上に通い続けた、という噂があったが真偽の程は知らない。そうして創立総会。

総会の会場に弘道館を選んだことに、古い好みが強すぎるという声もあったと聞かされたが、今では弘道館でよかったと思っている。他に適当な会場もない頃で、少し前に発足した水戸ロータリークラブ（茨城最初のクラブ）もやはり同じ立場であった。史蹟弘道館が残る限り JC 創立の記念も残っているのであって、式場にあてられた館内主美堂（今では

とても貸してもらえない)は藩主烈公齊昭の休息の間であって、その子十五代将軍慶喜も、大政奉還江戸城明け渡し後水戸に帰ってきて、弘道館のこの主美堂で謹慎していたと伝えられている。(余談になるが美人画の鐙木清方に慶喜恭順の像があって江戸っ子清方の徳川鼻気を偲ばせる名作である)

今年の水戸 JC 新年総会で私はずつぎのように話した。

「創立当初の水戸 JC はエリート集団であった。30 年後の今の JC は大衆化した中堅パワー集団になった。創立の産婆役だった常陽の中山常務は、JC のメンバーには将来性のある優秀な人材を厳選して欲しい。銀行からも重役間で話し合って良い者を推薦する。20 年 30 年後手を取り合って茨城の商工経済の発展のために協力し合える仲間でなければ困るとやかましかったが、今になって見るとその言葉通りになっている」この話を初めて聞いた諸君にはかなりショックがあったと言うが、私はその話をして良かったと思っている。勿論、時代の流れと共に新しい変化があるのは当然のことである。しかもその変化の中にあって JC の、トレーニング、サービス、フレンドシップの基本的な三大原則は永久に不変である。この基本の上に立って、いつも新しい、いつも若い、いつもエネルギッシュな行動力を持った JC であって欲しいと期待しているのである。